愛知教育大学研究報告，47（人文・社会科学編），pp. 9～16, March, 1998

シムズの *Charlemont* におけるアメリカ神話と歴史の相克

中　村　正　廣

（外国語教室）

Simms's Pessimistic Attitude Toward American Myth in *Charlemont*

Masahiro NAKAMURA

(Department of Foreign Languages)

Guy Rivers (1834), *Richard Hurdis* (1838), *Border Beagles* (1840) において，シムズ（William Gilmore Simms）はそれぞれ1830年代のジョージア北部のゴールドラッシュ，アラバマとミシシッピのマレル事件を素材にして，旧南西部の無法と暴力に満ちた世界を描写した。次作の辺境ロマンス *Beauchampe: or the Kentucky Tragedy. A Tale of Passion* (1842) で彼が向かったのは，ケンタッキーの事件である。当時長女と三女を立て続けに亡くしていたシムズは，これを忘れんとするかのように毎日十五頁から二十頁を執筆，この作品は膨大なものとなった。ポウ，ロバート・ペン・ウォーレンなども関心を示したこの有名な事件は，1820年代に実際にケンタッキーで起きた殺人事件であり，これにヒントを得て書かれた *Beauchampe* は，文字通り旧南西部の血生臭い事件を描いた辺境ロマンスの範疇に入る。

シムズの小説は革命ロマンス，辺境ロマンス，植民地ロマンス，心理ロマンス，外国物ロマンスの五つに大別される。*Beauchampe* は「活発な筋の展開，強烈で激しい雰囲気，辺境気質や辺境の風景の絵画や素描を特色とする」[1]辺境ロマンスのシリーズのひとつとして計画され，シムズ自身辺境ロマンスの中で最も優れた作品と見なしていた。しかし，シムズ研究において *Beauchampe* は微妙な位置にある。リッジレィ（J. V. Ridgely）はこの作品を辺境ロマンスのグループに入れつつも辺境ロマンスの特色はないと言う。[2]辺境ロマンスの定義にマッチしないとするウィムサット（Mary Ann Wimsatt）は，「背景もしくは主眼点において［辺境ロマンスと］関係する」[3]作品として，心理ロマンスの *Confession* (1841) と一緒にこの作品を挙げている。ギルズ（John Caldwell Guilds）は，フロンティアの野蛮な力の描写に拘ったためシムズの想像力は抑圧されたというポウの批評で傍証を固めながら，センセーショナルな物語にリアリズムの意識を浸透させられないでいるとして戸惑いを表明している。[4]

フィードラー（Leslie Fiedler）は *Beauchampe* を「婦女誘惑の原型的テーマを女性の内なる要求と男性の内なる恐怖という問題に関連づけることに成功した」[5]作品として高く評価している。しかし，悪が善によって滅ぼされる伝統的ロマンスの枠組み――シムズがこの作品の中で執拗にロマンスと悪の滅亡を結びつけ，誘惑者の悪が正されないストーリーの展開に幾度となく言及して弁明を繰り返しているのは，当時の読者が求めた伝統的ロマンスを彼が意識していたからである――のアナグノリシス（発見）[6]が用意周到に先延ばしされた「三一致を顧みず，舞台監督の許可も得ずに人々が行き来する社会的物語」[7]では，主人公マーガレット・クーパーの知的高慢はシムズの非難や攻撃を受けつつも決して破壊されることはない。J.F.クーパー以来アメリカ辺境ロマンスに見られる原型的テーマ――アメリカの大自然に忍び寄るキリスト教文明――にシムズが執着しているためである。

Beauchampe がそれまでの辺境ロマンスと著しく異なる点は，その描写の対象となる辺境の成熟度にある。*Guy Rivers* 等においては辺境は開拓者と猟師が混交している状況にあり，まさしくシムズ自身が定義する辺境，つまり「野蛮でもなければ社会的でもない，中間的地帯」[8]を描写している。しかし，*Beauchampe* は「我々の森の文明化の第三の進歩」(9)を描いている。完全に文明化はされていないものの中間的段階から後期に移った社会，野蛮から遠ざかるという意味においては理想郷に近い世界と言ってよい。*Beauchampe* の前半部は特にこの点に描写の重点が置かれている。

1853年ニューヨークの出版社レッドフィールドがシムズの作品の改訂版の出版を始めたとき，シムズは様々な修正や改訂を加えているが，*Beauchampe* は，1856年，*Charlemont: or the Pride of the Village. A Tale of Kentucky* と *Beauchampe: or the Kentucky Tragedy. A Sequel to Charlemont*（以下 *Beauchampe*）として別個に出版された。マーガレットがウォーラム・シャープに誘惑され捨てられる第一巻と，その復讐を主とした第二巻とは趣が大いに異なる。シムズの他の辺境ロマンスの特色をこの二巻に読み込むことは難しいが，特にこのことは第一巻について言える。シムズがレッドフィールド版で別個の作品として独立させたのはひとつにはこれが原因している。本稿

では第一巻を改訂した *Charlemont* を，楽園に近づいた社会に忍び寄る悪という点から考察したい。

(1)

Charlemont の第一章「情景」は，辺境ロマンス第一作目の *Guy Rivers* の第一章「不毛の景色と孤独な旅人」とは対照的だ。*Guy Rivers* では五月の温暖な天候に恵まれていても回りの風景は荒涼として陰鬱であり，ほとんど文明人の手が入っていないこの世界は自然の恵みも与えられていない。この不毛という呪いを埋め合わせるものは，病める希望と不自然な情熱を持った倒錯した心にとって「画趣をそそる森の住まいの荘厳さや美観よりももっと貴重な」[9]金（ゴールド）であるか，もしくは主人公ラルフ・コレトンのように荒野にロマンチックな夢を抱いた旅人が金色の夕陽が一時的に作り出す美しさに見い出す幻想だけである。

ラルフが入っていくジョージア州北部の「金の村」（第五章の章題）チェスタティーは，不法定住者，冒険家，夢想家，無法者などが寄り集まって築き上げた村であり，南部や西部の内陸部の開拓地に有りがちな争い，不満，強奪は言うまでもなく，金採掘グループの抗争も絶えない。村の中央の広場には裁判所，牢獄，酒場兼用の宿屋，鍛冶屋の店が互いを遠ざけるようにして顔を突き合わせている。鍛冶屋から時折聞こえるハンマーやふいごの音は「より文明化され統制された社会の快い協調とは言わぬまでも，それがいつも持つ陽気さと魅力」(*GR*, 65)を見せ，酒場は笑いと光をふんだんに吐き出しているが，裁判所と牢獄が与える陰鬱な雰囲気を軽減することはない。開廷や安息日の礼拝のとき，またワシントン誕生日や独立記念日など，裁判所のキューポラの鐘が響き渡ることもあるし，所定めぬ牧師が村にやって来れば裁判所は礼拝所にも変容するが，裁判所と牢獄が「南部と西部の開拓地の形成における本質的核」(*GR*, 64)であることに変わりはない。

Charlemont は厳しい三月の嵐が止み穏やかな春の季節を迎えたケンタッキーの描写で幕を開ける。辺りの情景は陽光，にわか雨，時折吹くそよ風，樹木の花々の息吹，さえずり始めたばかりの小鳥たちの歌に満ちている。若々しさと微笑みに満ちた春の到来は，毎年繰り返されるもの――「長い間追放されていた最愛の君主の接近」(13)――である。岩と森だけの単調で荒涼とした景色から緑の森に囲まれた美しい住まいに変化したのは，インディアンを駆逐した白人開拓者たちの創造性に満ちた力によるものであった。

> The savage had disappeared from its green forests for ever, and no longer profaned with slaughter, and his unholy whoop of death, its broad and beautiful abodes. A newer race had succeeded; and the wilderness, fulfilling the better destinies of earth, had begun to blossom like the rose. Conquest had fenced in its sterile borders with a wall of fearless men, and peace slept everywhere in security among its green recesses. Stirring industry—the perpetual conqueror—made the woods resound with the echoes of his biting axe and ringing hammer. Smiling villages rose in cheerful white, in place of the crumbling and smoky cabins of the hunter. High and becoming purposes of social life and thoughtful enterprise superseded that eating and painful decay, which has terminated in the annihilation of the red man; and which, among every people, must always result from their refusal to exercise, according to the decree of experience, no less than Providence, their limbs and sinews in tasks of well-directed and continual labor. (14)

自然の開拓は怠惰と虚弱と敵対する合衆国の最も高潔な側面のひとつであり，従ってインディアンがアメリカの風景から消えていったのは自然の理にかなったことであったというメッセージがここにはある。神の恵みが人間の労働に応えた結果としての自然の美がシムズによって描かれている。

だが，自然の調和の完成を謳うにはこの社会には未だ欠けているものがある。インディアンの消滅の後にも完全な文明の恩恵は訪れてはいない。「多様で外から入ってきた民族が新しい国に植民する際に例外なく見せる，あの沸き返るような状態」(15)にあり，ここには「非好戦的な人々の楽しい家庭や安全な財産」(15)を守る社会秩序が欠落している。このような世界では，野性的な男は自分が受けた不当な悪事の恨みを自分の力で晴らし，強者は罰を受けることなく大きな罪を犯すことが可能だ。一方，「町の境界線の内側で」「無垢を抱く処女の胸」(16)を汚した悪名高い狡猾な犯罪者を処罰する彼らは，「不意の愛国者」「未だ顎髭も生えやらぬ英雄」(16)とも表現されている。「インディアンと互いに足をかけるようにして取っ組み合いした恐れを知らぬ第一世代の開拓者の習慣と情熱」(15)は未だにその影響力を失っていない。かいつまんで言えば，第一章「情景」の展開は西進運動によってインディアンを撃退消滅させた後の白人世界に残る秩序の欠落を指摘している。

チャールモントの村はケンタッキー州の「前途洋々たる新しい州都」[10]のフランクフォートとは好対照をなし，この二つの町村の間にエリスランドの村が存在している。エリスランドはウォーラムがチャールモントに滞在しながらフランクフォートの友人たちと連絡を取り合うために使われているという意味でも，正し

くチャールモントとフランクフォートの中間的存在である。

興味深いことに，酒場つき宿屋と鍛冶屋の店，拷問台，教会と言った建物を持つエリスランドの村はチェスタティーの村を確実に想起させる。本稿の冒頭で既に述べたように，シムズのチャールモントの描写の意図は「森の文明化の第三の進歩」(9)を明示することにある。エリスランドが地図の上には現れないような小さな村であり，かつ *Guy Rivers* の背景となるチェスタティーの村と同次元の開拓の段階にあるとすれば，エリスランドの方が第一期に近いはずであり，チャールモントが第三期の開拓地であるはずがない。そう言えば，確かにシムズはチャールモントの村を「文明化の第三期」と表現してはいない。フランクフォートとエリスランドを森の文明化の二つの形（勿論前者が後者より文明化され上品になっていることは明らかである）とすれば，チャールモントを「次の，もうひとつの進歩」と読むことも可能だ。つまり，チャールモントは西部の開拓地の変化から外れたもの——「皆が往来する街道」(26)にはない——，「さながら魔法をかけられたかのようにこの椀状の自然の地に落下したように思われる十二軒ほどのこざっぱりした，好運が微笑む田舎屋」(18)の集落，言い換えれば理想郷としての開拓地である。春を迎えたこの村は新緑の草木に包まれ，野の花は「朽ちることのない美の胸［真ん中］」(17)で青と緋の優美なひだ飾りを誇示している。これは，*Richard Hurdis* の粗野で貧しいタスカルーサの村の，「森の淀み」と「湿地と洞窟の冷たく覆われた内奥」を変化させる「沸き返るような生命の蠢き」11とも異質なものだ。

この自然の美に満ちた村に住み着いた村人たちは，「獣よりも優れているという主張の大半が基づいている美的感覚と感性」の持ち主であるが，同時に彼らは放浪する他のアメリカ人たちと違わぬ「退屈した人々」「不満を持つ人々」(18)と表現される。この物語が語られる頃はこの果樹と花々に満ちた「庭」は最早存在しないこともシムズによって提示されている。これほど肥沃で美しく健康によい土地が放棄されたのはなぜか。

> It was most probably abandoned... in compliance with that feverish restlessness of mood—that sleepless discontent of temper, which, perhaps, more than any other quality, is the moral failing in the character of the Anglo-American.... The restless energies which distinguish them, are, perhaps, the contemplated characteristics which Providence has assigned them, in order that they may the more effectually and soon, bring into the use and occupation of a yet mightier people, the wilderness of that new world in which their fortunes have been cast. (19)

アメリカ人の気質は新奇なものに引かれ，衝動的に行動するところがあり，より深い森の中により魅力的な土地があるという知らせを耳にしただけで移動を開始する。しかし，口当たりのよい水と実りの多い原野の兆しにアメリカ人が寄せた期待が裏切られ，彼らが求める変化はただ目新しさを持った幻想にすぎないことがやがて判明するのである。

シムズはアメリカの自然と白人文明の衝突をエデンの園とこれを破壊する蛇という観点から見ている。次節ではチャールモントに居を構える二人の白人，元弁護士で教師のカルヴァートと，マーガレットをひたむきに愛するウィリアム・ヒンクリィを以上の視点から分析してみよう。

(2)

カルヴァートは元弁護士，ウィリアム・ヒンクリィはカルヴァートに師事して弁護士を目指して勉強中の若者だが，二人が弁護士という職業を共有することは重要である。シムズ自身も弁護士であったことも考慮に入れながら，この設定が本稿のテーマの分析にどんな意味を持つかという検討から始めて二人の分析の糸口にしたい。

Guy Rivers のレッドフィールド版でチャールズ・R・キャロルへの書簡を序文に掲げたシムズは，若かりし頃弁護士として政治家として社会の変革に精出していたことに触れ，「愛国主義という突拍子もない空想を二人とも抱いていた」(*GR*, 8) と回顧しつつ，政治家が破壊するものは何もなく，あるとすれば彼ら自身であり他の政治家だけであると結論づけている。社会が自らに忠実である限り，つまり，「共同体がきちんとその道徳を守り，礼節を乱すことを許さず，後を振り返ることなく精力的に進歩のために身を粉にして働き，そして社会全体の目的の遂行に健全な熱意を抱くと同時に公言した目的に断固として執着するほどの男らしさがあるならば，社会は政治家といった連中の気まぐれから自分の身を守ることができる」(*GR*, 8)。アメリカ社会の発展を確信すると同時に，弁護士や政治家は社会にとって取るに足らない存在——「滞在中は僅かな損害を与え，立ち去るときは不快な臭いを後に残し，それでいて駅馬車の車輪に止まって粋がっている蝿ほどの影響しか世界の進歩に及ぼさない」(*GR*, 9) 輩——というシムズの思いがここにはある。

Border Beagles の主人公ハリー・ヴァーノンを除けば，シムズの辺境ロマンスに登場する弁護士は欲得ずくの人間か，もしくは社会に根強い反感と不信を抱く人間のどちらかである。前者の例としては *Guy Rivers* に登場するピッピン弁護士がいるし，またエリスラン

ドに住み着き，村の名を古典的な名に変えるという「愚か」(352)なことに腐心する二人の弁護士も挙げることができよう。*Beauchampe* は選挙に出馬した弁護士たちがよれよれの服を着て自らの共和主義を強調し，相手方の貴族趣味を攻撃する滑稽な場面を披露している。脾肉の嘆をかこった挙げ句に勤めていた裁判所を辞めて悪の道に入ったガイ・リヴァーズ，*Charlemont* でウィリアム・ヒンクリィと対決するウォーラム・シャープなどが後者の例である。

以上のことを考慮すると，カルヴァートが弁護士という職業に高邁な理想を抱いたために失敗したという設定は重要である。物語に登場するカルヴァートは，大都市という「せわしない世界」(139)から遠く離れた辺鄙なチャールモントで学校の教師をしている。今は田舎に隠居という形を取っているものの実際は追放の身である。自らの過去を「喜びと自責の念」(139)で振り返る彼は，外的事物には目もくれない。そればかりか，森が「昔の挫折した希望の記憶で自分を嘲っている」(151)として一人で散策するのも躊躇している有り様だ。彼の一番の楽しみは，「若き日の大望の挫折した目的と無駄に終わった苦役を忘れ」(215)させてくれるロマンスに読み耽ることである。

> Its high wrought and elaborate pictures of strife, and toil, and bloodshed, grew vividly before the old man's eyes; and then, to help the illusion, were there not the portraits—mark me—the veritable portraits, engraved on copper, with all their titles, badges, and insignia, done to the life, of all those brave, grand, and famous masters of the order, by whom the deeds were enacted which he read, and who stared out upon his eyes, at every epoch, in full confirmation of the veracious narrative? No wonder that the old man became heedless of external objects. No wonder he forgot the noise of the retiring urchins, and the toils of the day, as, for the twentieth time, he glowed in the brave recital of the famous siege—the baffled fury of the Turk—the unshaken constancy and unremitted valor of the few but fearless defenders. (140-141)

トルコ人の攻撃の手からマルタ島を防御する事件を謳った物語は，「殺戮と不浄な死の喚声で冒瀆する」(14)インディアンと戦った辺境者の物語と同様に「まさに歴史であると同時にロマンスでもある」(140)。「人間の最も厳粛な関係における自らの運命，人間の希望，愛情，心，いや国民と国家と関わる」(142)点において，異教徒と戦った「恐れ知らずの者たちの揺るぎない努力と砕けることを知らぬ剛勇」が防御する砦は，征服によって不毛の辺境を取り囲んだ「恐れを知らぬ男たちの壁」(14)と同じであると言ってよい。

カルヴァートが弁護士として目指したものはこの神聖な戦いに参加することであった。勢い彼の非難はこのような感情と想像力を無視して法律と政治の二足の草鞋を履く傾向があるアメリカの弁護士たちに向かうが，「道徳に関しては風向き次第で動く風見と同じで，一定の場所に定着するとすれば自分の錆で動けなくなったときだけ」(143)というアメリカ人にカルヴァートの思いは通じることはない。郵便局長，治安判事，町議会議員，酒場の主人という「四つ足の人物」で「政治生活において二年毎に民主党員になったりホイッグ党員になったりする」(352)エリスランドの宿屋の主人はアメリカ人の典型とも言える。

カルヴァートが「せわしい世界」から追放されたのは，実は彼自身不可能なことを追求したからである。資格やわずかな報酬を求めて他人の利益に尽くすような弁護士を嫌悪した彼が弁護士を目指したのは，「世界に普遍の法，その源泉，その真正の目標，その公正なる原理，その道理にかなった権威ある見解」(155)を知るためであった。聖書，ホーマーからフランシス・ベーコン，ミルトン，シェイクスピアまで，およそ演説と哲学と関係するものすべてを研究し，また実業家と頻繁に接触することによって直接的表現を習得し，著名な弁護士から飾らない力強い話し方を具に研究することもやってのける。だがカルヴァートは陪審員の前で一度目は失神し，再起を図った二度目は言葉が出てこないという失態を演じる。

カルヴァートが何度挑戦しても弁護士として言葉を失うのは，彼が認めるように，自分の理想が達成できないという恐怖感，「自分が定めた判断基準」(158)のせいである。「自分よりは劣っていながら優れた神経を持った」(159)弁護士たちの「攻撃に前進し，失神から回復しては敗北を埋め合わせる」精神の勇敢さが彼には欠如している。

一方，カルヴァートが自分の夢を託すウィリアム・ヒンクリィは田舎の若者である。マーガレットが拒否するチャールモントの陽気さと音楽を楽しむことができる点において，田園的風景になじむ人物だ。第二章「質朴と蛇」は質朴な牧師クロスと一緒にチャールモントに侵入したウォーラムを描写するが，ウォーラムの正体を見破る村人たちが一人もいない中で，マーガレットを愛しているウィリアムだけはウォーラムを一目見ただけで嫌悪どころか敵意を抱く。クロスがウォーラムを滞在させるのは「都市の居住者の家よりも平原に張られた族長のテントといった風情の」(63)ウィリアムの家である。

「聖餐台上のヒキガエル」(第六章の章題)，そして蛇としてのウォーラムの登場で，ウィリアムの「エデンの園」(85)の花は「胴枯れ病」(85)に襲われる危機に瀕

している。

> So rapid had been the stranger's progress—so adroitly had he insinuated himself into this Eden of the wilderness—bringing discontent and suffering in his train—that the now thoroughly-miserable youth began to fancy that nothing could be save from his influence. In a short time his garden would all be overrun, and his loveliest plants would wither.... He brooded over images of strife, and dark and savage ideas of power rioting over its victim, with entirely new feelings.... Besides, William Hinkley, though meek and conscientious, had not passed through his youth, in the beautiful but wild border country in which he lived, without having been informed, and somewhat influenced, by those characteristic ideas of the modes and manner in which personal wrongs were to be redressed. (237-8)

エデンの園というイメージがウィリアムの愛に関して用いられていることは明らかだが，上の引用はエデンの園が個人的レベルから国家的レベルにまで敷衍されていることを物語っている。「不満」を抱く欲得づくの連中が「荒野」であるエデンの園に「前進」してきて「庭」は「荒廃」させられる。ここに至って初めてウィリアムは「闘争」を想像し，蛇にあらがう力を「邪悪で残忍な」胸中に求めるが，それは「穏和で良心的な」辺境人の心から生まれ出たものだ。

以上のようにカルヴァートとウィリアム・ヒンクリィの人物描写は，チャールモントのエデンの園としての性格をより鮮明にしている。次節では，不満と落ちつきの無さを見せるマーガレット・クーパーと，これを「口説き落とす」(「征服する」) ことをもくろむウォーラム・シャープを同じ観点から見ていきたい。

(3)

ウォーラムは叔父と一緒にミシシッピへ向かう道中チャールモントに立ち寄る。彼の叔父はこの村に「穏やかな風景一面に広がり，これを神聖なものとしているように思われる平和を漂わせた気持ちのよい雰囲気」(32)を見て取り，自然美と人間の道徳がマッチした理想的楽園と解釈する。しかしウォーラムはこれに囚われるどころか，叔父の楽観的視点を揶揄してやまない。燃えるような目，生気ある口元，快活な顔の輪郭，ほっそりとした顎など，外見的魅力は人の注意を引くものの，この人物は冷笑と風刺の傾向を持つ。その目線は「不吉」(21)ですらある。

「都会生活の人工的楽しみ」(32)を賛美するウォーラムは自然にロマンスを感じることはない。村の若者たちにアポロやノアの子孫のニムロッドを見ることもなければ，村の娘たちにヴィーナスやダイアナの靴紐を結ぶニンフを見ることもない。人間の間に平和と調和を見る彼の叔父が神を信じる当時のアメリカ人たちの素朴さを表すとすれば，ウォーラムの不敬はそのアメリカ人たちが持つ傲慢さ——すべてを神のみ業と解釈して，何かことがあれば自然の世界が道徳の世界に警告するはずだと信じ切っている現実——を暴露する役目を担っている。

ウォーラムのエデンの園への侵入を手助けするのが，ジョン・クロスというメソジスト派の牧師である。「西部の森のほとんどに宗教を広めた主たる力であり先駆者である」(48)メソジスト派は *Guy Rivers* の野外伝道集会にも登場する。この宗派ほど文明や良い習慣，道徳を一般大衆に広めてきたものはなく，謙虚で節度ある欲望と根気強い善行を持つ彼らは，「神の愛と人間に対する善意に満ち溢れた状態で，最も辺鄙で危険な場所へ恐れずに向かった」(*GR*, 141) とシムズは書いている。クロスが克己を説きながら暖炉の側の暖かい椅子を求めるような聖人気取りの聖職者とは違うという指摘もなされていることから，「住民に関わる様々な事柄と，日々の欲求と，そして緊急を要する道徳的，人間的，社会的関心事と，聖書の一節を直接実際に適用する」(76)質朴で聖人ぶらないクロスへのシムズの評価は決して低くはないと言ってよい。

しかし，ミシシッピ，アーカンソー，テキサスの荒野が広大な森と豊かな土壌に恵まれた大自然であることを賛美しつつ，そこに住む「フロンティアの粗野な男と赤い野蛮人」(52)を改宗することを喜びとしているクロスの言葉には，白人開拓者たちの征服欲望が窺われる。

> The toil and the peril, the pain and the privation, in a good cause, increase the merit of the performance in the eyes of the Lord. What matters the roads and the bridges, the length of the way, or the sometimes lack of those comforts of the flesh, which are craved only at the expense of the spirit, and to the great delay of our day of conquest. (53)

チャールモントの村人たちには「非常に重要な満足」(*B*, 16) が欠如しており，やがて村を離れ南部や西部の辺鄙な地域の森に移動していくが，その中でウィリアム・ヒンクリィの家族はジョン・クロスの布教活動に従い，チョクトー族の地に居を構えるのである。

キリスト教と西進運動を結びつけるクロスの助手としてチャールモントに侵入したウォーラムは，白人文明が積極的に拡大している鉄道や銀行など，新しい変化を象徴している。確かに「村の静寂を破壊し，村の慈善行為を抑圧し，村人の落ち着いた習慣と快適な生

活手段を減殺する」(18)ことによって「村の人口を増加させ，村を繁栄させる」(18)ような投機はまだチャールモントに多大な影響は与えていないが，既にその兆候はこの村の回りで起きつつある。

> The signs were all and everywhere favorable. Speculation was beginning to chink his money-bags; three hundred new banks, as many railways, were about to be established; old things were about to fleet and disappear; all things were becoming new; and the serpent entered Charlemont, and made his way among the people thereof, without any signs of combustion, or overthrow, or earthquake. (95)

多くの銀行や鉄道が建設されようとしている地域とチャールモントとの間には時間的空間的差異はない。チャールモントの村人たちは「起きつつあることを予感している」(95)けれども，それがどのようなものになるかは認識していない。人間が自ら引き起こす変化を事前に知ることはない。それが可能だと考えている「ご立派な人々」(94)は悪魔によって虚栄心を植え付けられているだけの話である。かくして「田園生活の慎ましい喜びとセンスと様々な特色」(32)をあざ笑うウォーラムは，イヴが楽園から追放されたときと違って「激動も転覆も地震」も引き起こすことなく密かにチャールモントに侵入する。

ウォーラムから「征服」される女性マーガレットは背が高く大きな黒い目をしたブルーネット，いわゆるダーク・レディである。他の女たちが亜麻色の幼児を胸に抱いているとき，また，搾乳所，キャベツ畑，裁縫針などについて誰が最もよく知っているか，誰が子供の顔を巧く洗い髪に櫛を入れることができるか，誰が腸詰めの肉を巧く切ることができるかを他の女たちが競っているとき，彼女は一人空を見上げ雲を突き刺すように眺め，詩を歌う。朝な夕な一人岩や森や川を眺めては，他の女性たちを「最も卑しい奴隷」(177)として蔑む。森を書物とし，孤独を教師としている彼女は，まさに「飛翔のために翼を広げ，うねうねと漂う雲を突き抜けようとして瞳を凝らしている鷲」(404)である。

マーガレットは「余りに大胆で慎重さを知らず，余りに冒険好きで警戒を知らぬ」(404)ため，ウォーラムによっていとも簡単に「征服」される。従って *Charlemont* はフィードラーが言うように，「リチャードソン神話によって女性に割り当てられたつつましやかで長い忍耐を必要とする役割を演じることを女性が拒否するのに対し，アメリカ文学の中で初めて抗議した小説」[12]と解釈もできる。

しかし，マーガレットは婦女誘惑の原型的役割だけをあてがわれているだけではない。彼女の人物描写は辺境と密接に絡み合う形で提示されていることに注目すべきである。彼女は「男性的で，威風堂々とした，満足することのない，誇り高い，イライラした，大望を持った」(37)女性であり，チャールモントの陽気さと音楽から一人離れた存在であるが，彼女の軽蔑の対象は田舎の人間だけに限定されてはいない。都会の紳士淑女が有する趣味や能力も，彼女からすれば「特に言い立てるほどのものでもないセンスとつまらぬ創造力」(178)でしかない。ウォーラムはマーガレットの主張する独創的詩が「西部」(179)に存在すること，そして大西洋岸の人々の暗黙の了解として「大西部への期待」(179)があることを指摘する。

> Let them but hear the true minstrel—let them but know that there is a muse, and how soon would the senseless twitter which they now tolerate be hushed in undisturbing silence. In the absence of better birds they bear with what they have. In the absence of the true muse they build no temple—they throng not to hear. Nay, even now, already, they look to the west for the minstrel and the muse—to these very woods. There is a tacit and universal feeling in the Atlantic country, that leads them to look with expectation to the Great West, for the genius whose song is to give us fame. (179)

ウォーラムが暗示療法的に使用する「利己主義の言葉と感情」(181)は彼の計略に気づかせないようにすることを第一目的とするが，同時にマーガレットの不満を解消することを狙っている。「彼女の魂の秘密，彼女の心の欲望，いや彼女の心に取り付いている妄想の姿そのもの」(181-182)を引き出す力をも有しているのであるから，マーガレット＝西部というウォーラムの指摘は偶発的なものではない。女性の権利が不当に抑圧されていると主張するマーガレットは，「すぐに手に入る近くの喜びを否定し，不可能とまでは行かなくても遠く彼方のことに思いを馳せる」(45)という点では，不満を糧に大きく西進するアメリカ人と変わらない。

では西部に居を構えたマーガレットはなぜに不平をかこつのか。インディアンの森に不満と心の葛藤をぶちまけるのか。それは彼女の前に存在する自然が今や「野性と荘厳さ」(167)を失っているからである。チャールモントには切り立った岩も小峡谷も瀑布もなく，たださらさら流れる小川と閑静な遊歩道があるだけだ。ウォーラムと同じく，マーガレットが不満を覚えるのは「まさにこの静寂であり，挑発の欠如であり，闘争と勝利の欠如である」(167)。

マーガレットが求めているものは，彼女がウォーラ

ムに捨てられて自殺を企てる森で二人の若い男女の話を偶然盗み聞きするときに再確認される。この西部の若者は「武者修行の騎士」(426)のごとくミシシッピ川領域で二年間にわたって「進取の気性と勤勉の遍歴の生活」(426)を求め,「辺境の生活を中世の文明生活の類のものに変える諸々の冒険」(426)を相手の乙女に語って聞かせるのだが，この話を聞いたマーガレットは自殺を放棄し，復讐の念に燃える。男性的な力を蘇らせた彼女は「死の武器」を「力の武器」(429)に変え，自分が受けた不正行為を正すことを目指す。

マーガレットはウォーラムによって征服されたかのように見えるが，イヴが欲していたものを蛇が提供したように，マーガレットはウォーラムがエデンの園に侵入する以前から既に西進運動のエネルギーに征服されていた。やがて *Beauchampe* においてアナ・クックと名を変えた彼女は，オーヴィル・ビーチャムという男性を通じて復讐を遂げる。「無垢を抱く処女の胸」を汚した狡猾な犯罪者を処罰するマーガレットは,「不意の愛国者」「未だ顎髭も生えやらぬ英雄」という役を自ら引き受けることによって，その不満をようやく解き放つことができるのである。

(4)

1831年の二月から五月にかけてシムズは旧南西部への二度目の旅行を行い，"Notes of a Small Tourist" をチャールストン・シティ・ガゼットに書き送っている。サヴァナ，オーガスタ，ミレッジヴィル，メイコンといったジョージア州の主要都市，モンゴメリー，モビール，クレイボーンといったアラバマ州の都市を経て，ミシシッピ州のニューオーリンズ，コロンビアまで旅している。1830年代初頭この旧南西部に属する地域には無数の小さな村や町が勃興し，商業都市は大都市化（ニューオーリンズはニューヨークを凌ぐ勢いであった）しつつあった。ジョージア州からアラバマ州に強制移住されられたクリーク族は，アラバマ州の一軒の宿屋の壁に張られたウィリアム・マッキントッシュの肖像画が象徴するように無力化されるか，酋長タクキナのように，多くの土地や黒人を所有しながらもその財産を急速に減らしつつあるか，のどちらかであった。ミシシッピ州はそのような西進運動の最先端に位置していた。

> We passed through several little townships and country seats, of little note, and not calculated to interest you. Innumerable little villages are springing up in every quarter, averaging in population about three hundred, and stagnating at that. The great rage at this time in Mississippi, is the possession of the new Indian purchase, the Choctaw lands. Many of the Choctaws have already gone to the Arkansas, and more are upon the go. I cannot but think the possession of so much territory, greatly inimical to the well being of this country. It not only conflicts with, and prevents the formation of society, but it destroys that which is already well established. It makes our borderers mere Ishmaelites, and keeps our frontiers perpetually so. Scarcely have they squatted down in one place, and built up their little "improvements," than they hear of a new purchase, where corn grows without planting, and cotton comes up five bales to the acre, ready picked and packed—they pull up stakes and boom off for the new Canaan, until they hear of some still better, when they commence the same game—death not unfrequently stopping them on the road, before they have had time to hew their burial stone from the quarries which surrounded them.[13]

アメリカ白人が先住民から強奪する対象はわずかに手を加えれば利用できる肥沃な土地である。彼らは社会秩序を築き上げ改善することを怠り，やがて新しいカナンの土地へ躊躇することなく移動する。ウィムサットが述べるように，ここに見られるフロンティアへの希望と文明人としての疑念の緊張は,「南部の大西洋岸地方と内陸の辺境地帯の間の緊張」[14]に等しく，シムズのアメリカ人に対する悲観的見方の表れと解釈していいだろう。「アメリカ国民の放浪癖はアメリカの完全な文明の障害となっている」(*RH,* 66) のである。

Charlemont は剝き出しの無法と強奪と流血に彩られた辺境ロマンスのひとつとして読まれるべき作品である。アメリカの西部開拓の描写の一つとして重要な意味を有しているからである。だがそこには他の辺境ロマンスで見られた視点と形式——特異な世界へ文明社会からはじき出された主人公が傷心を冒険心に変えて辺境に入って行き，様々な事件に遭遇，辺境を観察した後に，再び文明社会に戻ることを許される——と違った手法があることを見逃してはならない。この新しく導入された視点が注がれているのは，簡潔に言えば，西進運動に囚われ抜け出せないままに移動していくアメリカ人の姿である。

ウォーラムの「相当な知性」もマーガレットの「奔放で異常な天才」も，「我々を元気づけては楽しませ，幾多の嵐と危険を通り抜けて威儀堂々とした帆船を安全な港へ案内し，征服し命令し，数千年もの後代にわたって人間の心にメロディを奏でる歌を歌うあの天才」(293)に見えるが，しかし実際は「進歩という永遠なる法則」(292)に従ってがむしゃらに突き進む盲目の媒体であり道具でしかない。二人はチャールモントが

提供する「蕾と花が魅力的に入り乱れている……朽ちることを知らぬ美」(17)を拒否して闘争を求めていく。

カルヴァートはマーガレットが漂わせる「奔放で異常な才能」を危険視してはいるものの，ロマンスへの彼の没頭は彼女の才能には抗しがたい魅惑があることを物語っている。彼の弟子ウィリアム・ヒンクリィも結局はチャールモントからの国外追放を自分の意志で選択する（この人物はシムズ個人の見解に近いものを *Beauchampe* で窺わせており，次の機会に詳しい考察を加えたい)。ウォーラムと一緒に旅する初老の男性にしても，チャールモントを理想の楽園と見なしながらそこに安住するつもりなど毛頭なく，ミシシッピに向かう。アメリカ人の放浪癖からの離脱と解放はあり得ないというシムズの思いが *Charlemont* に投影している。チャールモントはアメリカの歴史の「皆が往来する街道」から外れた世界でしかなく，早晩消えていく運命にあった。

注

1 Mary C. Simms Oliphant, Alfred Taylor Odell, and T. C. Duncan Eaves, eds., *The Letters of William Gilmore Simms* (Columbia, S. C.: Univ. of South Carolina Pr., 1952-56), I, 339; II, 225-226.

2 Joseph V. Ridgely, *William Gilmore Simms* (New Haven: College and University Pr., 1962), 87.

3 Mary Ann Wimsatt, The *Major Fiction of William Gilmore Simms: Cultural Traditions and Literary Form* (Baton Rouge: Louisiana State Univ. Pr., 1989), 93.

4 John C. Guilds, *Simms: A Literary Life* (Fayetteville: The Univ. of Arkansas Pr., 1992), 164.

5 Leslie A. Fiedler, *Love and Death in the American Novel* (New York: Stein and Day, 1975), 222.

6 Northrop Frye, *Anatomy of Criticism: Four Essays* (Princeton: Princeton Univ. Pr., 1957), 187.

7 William Gilmore Simms, *Charlemont; or, The Pride of the Village. A Tale of Kentucky* (Chicago: Donohue, Henneberry & Co., 1890), 291. 以下，このロマンスからの引用の頁数は括弧に入れて示す。

8 *L*, II, 225.

9 William Gilmore Simms, *Guy Rivers: A Tale of Georgia* (New York: AMS Pr., 1970), 14. 以下 *GR* と略記。

10 William Gilmore Simms, *Beauchampe; or, The Kentucky Tragedy. A Sequel to Charlemont* (Chicago: Donohue, Henneberry & Co., 1890), 53. 以下 *B* と略記。

11 William Gilmore Simms, *Richard Hurdis: A Tale of Alabama* (Chicago: Donohue, Henneberry & Co., 1890), 120. 以下 *RH* と略記。

12 Fiedler, 221.

13 *L*, I, 37-38.

14 Wimsatt, 91.

(平成9年9月10日受理)